

<自由投稿>

ライマンと北海道—日米文化交流の視点から—

関 秀志¹⁾

Benjamin S. Lyman and Hokkaido

- From the view of cultural exchange between Japan and the United States -

*Seki Hideshi*¹⁾

2024年4月18日受付

2024年8月1日受理

1) 北海道史研究協議会 会長, 〒065-0043 江別市野幌代々木町30-13

Nopporo yoyogi-cho 30-13, Ebetsu City, Hokkaido 069-0817, Japan

Corresponding author: Hideshi Seki

Keywords: Benjamin S. Lyman, Hokkaido Colonial Department, geological survey of Hokkaido, cultural exchange, Lyman Collection

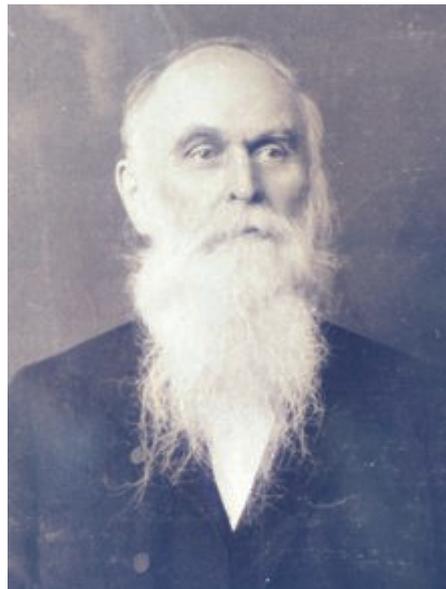
1. はじめに

ベンジャミン・スミス・ライマン (Benjamin Smith Lyman, 1835 ~ 1920) は、開拓使が北海道開拓のために招いた「お雇いアメリカ人」の一人で、明治6年(1873)に来日し、同8年まで地質測量鉱山士長として北海道の地質・鉱床調査に従事し、その後、内務省、工部省に移り、同13年に日本を去るまでのおよそ8年間にわたり、調査と報告書の作成を行うとともに、優れた鉱山技術者を育て上げ、日本、特に北海道の炭鉱などの鉱業開発と地質学の発展に多くの功績を残した。

彼の業績については、既に多くの文献で紹介され、北海道開拓記念館(現北海道博物館)、北海道大学総合博物館などで特別展示会も開催されている。

本稿は、一般にはあまり知られていない地下資源調査以外の北海道開拓政策に関する指導・助言や、親日家だったライマンの日本での暮らしぶりや日本・日本人観、彼が日本で収集・記録し郷里のマサチューセッツに残した膨大な日本・北海道関係資料(ライマン・コレクション)及び道民も協力したその保存運動などに重点を置き、日米文化交流史の視点から見ることにしたい。

なお、本稿は2023年5月27日、北海道大学総合博物館で開催された「ライマン来道150周年・2023年度“地質の日”記念講演会」(主催:地質の日記念事業実行委員会、共催:北海道大学総合博物館)における筆者の講演資料に加筆したものである。



第1図 ベンジャミン・スミス・ライマン(地質測量鉱山士長) [U.MASS]

[註] 図の末尾に記した所蔵機関の略称は次のとおり。

- ①北海道大学附属図書館→〔北大〕, ②マサチューセッツ大学アマースト校図書館→〔U.MASS〕, ③フォーブス図書館→〔FORBES〕, ④ 略称の記載のない図は筆者所蔵・撮影。

2. ベンジャミン・スミス・ライマンの略歴

ライマンの略歴は、次のとおりである。

1835(天保6)年12月11日、マサチューセッツ州ノーサンプトンの旧家に生まれ、ハーバード大学卒業後、フ



第2図 マサチューセッツ州地図 (北海道・マサチューセツ協会『10周年記念訪問団交流記録』2001(平成13)年

ランス, ドイツに留学し, 地質・鉱山学を学ぶ。

1862(文久2)年 帰国。その後, 国内の地質・鉱床調査, インドの油田調査等に従事。

1873(明治6)年1月 来日(37歳)。茅ノ澗炭田・積丹半島, 幌内炭田, 道南部沿岸等を調査し, 第1期調査報文を提出。

1874(明治7)年 石狩川・十勝川流域および北海道沿岸をほぼ一巡し, 調査報文・地図を提出。

1875(明治8)年 札幌・石狩・幌内地方(茅ノ澗・幌内・空知炭田等)を調査。幌内鉄道路線(幌向太一幌内)を測量。

1876(明治9)年 「北海道地質総論」・「日本蝦夷地地質要畧之図」などを提出。開拓使から内務省に移り, 新潟・長野の油田を調査。

1877(明治10)年 工部省に移り, 静岡・新潟の油田, 東北・長野・北陸地方の地質調査に従事。

1878(明治11)年 静岡・新潟の油田, 東北・北陸・中国・九州・四国・近畿地方の地質・油田調査に従事。門下生, 地質学社を創立。

1879(明治12)年 四国・近畿・東海地方を巡視。7月契約満期。『地学雑誌』発刊(翌年, 16号で終刊)。

1880(明治13)年12月 離日。翌年, ノーサンプトンに帰る。

1882(明治15)年 「日本油田之地質及ヒ地形図」を私費で印刷し, 旧門下生(助手)に贈る。

1887(明治20)年 フィラデルフィアに移り, ペンシルベニア州立地質調査所副長に就任(1895年まで)。

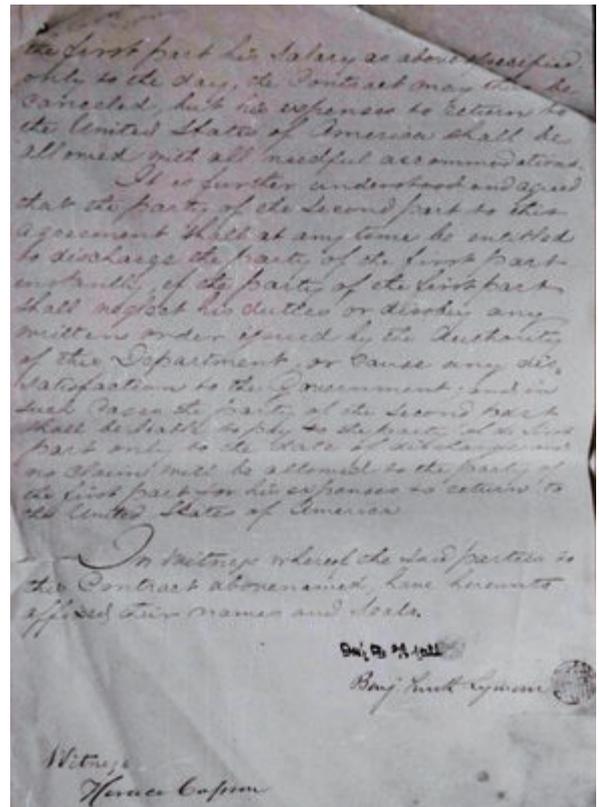
1895(明治28)年 フィラデルフィアに事務所を開設し, 鉱山会社の顧問技師となる。この頃, 日本に関する多数の論文を雑誌に発表。

1906(明治39)年12月 日本で旧門下生と再会。

1920(大正9)年8月30日 フィラデルフィアで死去(84歳)。



第3図 ライマンの旧宅 [左] ノーサンプトン市(現スミス・カレッジの寮), [右] フィラデルフィア市〔北大〕



第4図 開拓次官黒田清隆とライマンの雇用契約書
1873(明治6)年, 立会人H.ケプロン〔U.MASS〕

3. 明治初期における開拓使の欧米技術・文化導入とライマン

明治政府は近代化を目的とした殖産興業政策を推進するために, 広い分野にわたり多数の外国人専門家を招いた。開拓使が雇った外国人78人の内, アメリカ人が48人を占め, なかでも, 最高顧問のホーレス・ケプロン, 札幌農学校教頭ウィリアム・S・クラークなどマサチューセッツ州出身者が主導的役割を果たし, ライマンもその一人である。

3-1. 地質・鉱床(地下資源)調査

ライマンの待遇と調査内容は, 以下のとおりである。

職名: 地質学鉱山学教師・地質測量鉱山士長, 地質長兼鉱山士(師)・地質兼鉱山士長 (Chief Geologist and Mining Engineer)



第5図 [左] ホーレス・ケプロン (開拓使教師頭取兼顧問) [北大] [右] ウィリアム・スミス・クラーク (札幌農学校教頭) [北大]

契約期間：1872年12月7日 (明治5年11月7日) より3カ年 (延期, 明治9年2月内務省, 同10月2日工部省)

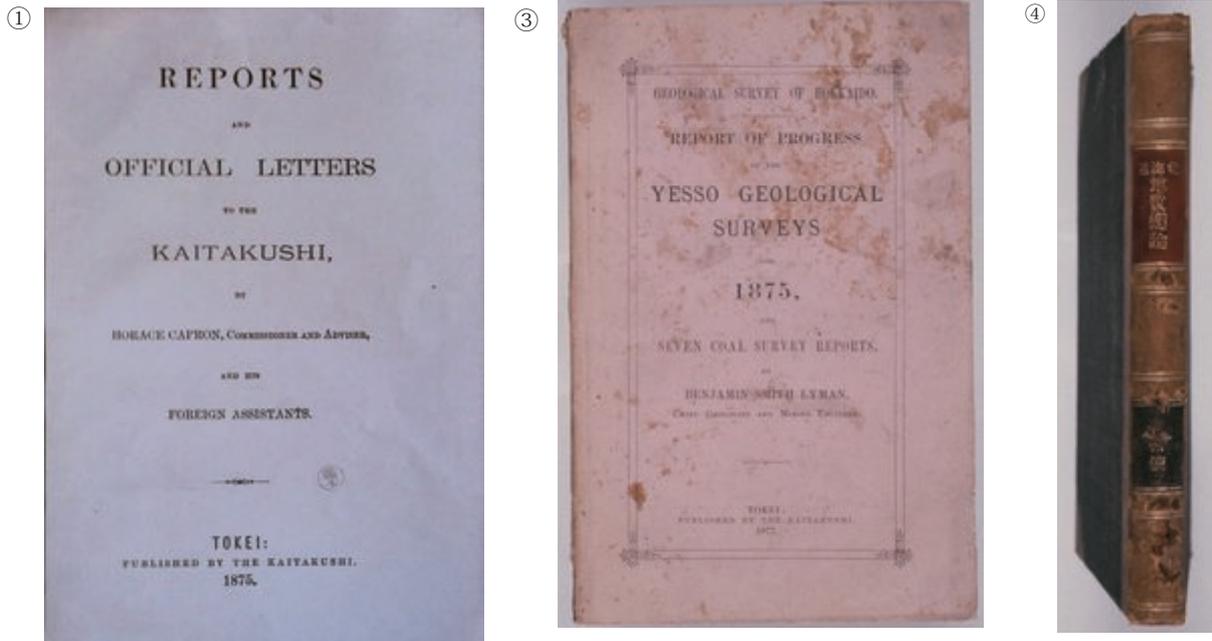
年俸：メキシコ銀7,000ドル [ケプロン10,000ドル, W.S. クラーク金貨7,200円]

北海道の調査期間：明治6(1873)年～同8(1875)年, 春～秋 (冬期は東京で調査のまとめ, および報告書作成)

調査の内容：主な調査目的は有用鉱産物の発見とその開発で, それと共に地質の調査, 標本の採集を行う。最も力を注いだ鉱産物は, 石炭 [茅ノ澗 (現在の茅沼), ポロナイ (幌内), ヌッパオマナイ (月形), マクンベツ (静内), ビバイ (美唄) などの煤田 (炭田)] で, 石炭以外では金・鉄・石油・硫黄・石灰岩・泥岩・マンガン・鉛・建築用石材など。

当時の踏査地は, 海岸部以外は大部分が道のない未開の原野・山林で, 宿泊施設がないため野営が多く, 危険と困難を伴った。調査には地質鉱山測量補助 (Assistant Geologist and Mining Engineer) のヘンリー・スミス・マンロー, 山内徳三郎外10余名の若い助手たち, 案内と食糧・資材の運搬を兼ねたアイヌの人たちが参加し, 調査隊は数十名に及ぶこともあった。

調査報告書と地質・鉱産図：1877 (明治10) 年『北海道地質測量報文』 (英文および和文), 1878 (明治11)



第6図 ライマンの報告書・論文



- ① REPORTS AND OFFICIAL LETTERS TO THE KAITAKUSHI, BY HORACE CAPRON, COMMISSIONER AND ADVISER, AND HIS FOREIGN ASSISTANTS. PUBLISHED BY THE KAITAKUSHI, 1875. 和訳版は『開拓使顧問ホラシケプロン報文』1879 (明治12) 年, 開拓使。ライマンや助手のマンローの調査報告書を含む。
- ② 北海道地質測量報文 - 1877 (明治10) 年, 開拓使 [U.MASS].
- ③ REPORT OF PROGRESS OF THE YESSO GEOLOGICAL SURVEYS FOR 1875, AND SEVEN COAL SURVEY REPORTS, BY BENJAMIN SMITH LYMAN, CHIEF GEOLOGIST AND MINING ENGINEER, PUBLISHED BY THE KAITAKUSHI, 1877 図7-②の英語版 [U.MASS].
- ④ 『北海道地質總論』 - 1878 (明治11) 年, 開拓使 (英語版は前年発行) [U.MASS]



第7図 ライマンの地図〔北大〕

- ① [上]「日本蝦夷地質要畧之圖」1876 (明治9)年, 開拓使 (英文標題付)
- ② [下]「大日本北海道石狩煤田各所ノ測量ヲ合併セル地質的兼地理的圖」1876 (明治9)年, 開拓使 (英文標題付)

年『北海道地質總論』(英文は前年), 1876 (明治9)年「日本蝦夷地質要畧之圖」(明治9 (1876)), 1882 (明治15)年「日本油田之地質及ヒ地形圖」など。北海道に関する報告書・論文20種以上, 同地質・地形図26種, フィールドノート18冊。

これらの報告書・地図は我が国の近代科学技術史の重要資料であり, 北海道・日本の鉱業開発と地質学の発展に貢献した。

さらに, その内容は, 地質・地下資源にとどまらず, 明治初期の北海道各地の状況と先住民族アイヌの人々の社会・文化を知る上からも価値の高い踏査記録となっている。

3-2. 優れた鉱山技術者の養成—技術教育—

ライマンの調査には10余名の日本人の青年たちが助手(地質補助)として参加。

元開拓使仮学校生徒: 稲垣徹之進, 桑田知明, 賀田貞一, 三澤思襄, 坂市太郎, 齋藤武治, 高橋(杉浦)襄三, 前田精明, 山際永吾, 西山正吾, 島田純一

開拓使御用掛等: 山内徳三郎, 秋山美丸, 前田本方, 安達仁造など。

事前教育: 東京におけるライマンとマンローによる初歩的な数学・物理・化学, 地質測量, 地質・鉱物学の指導。

現地指導: 調査旅行中は助手たちと寝食を共にし, 実用的な地質学と地質調査の方法を指導。

冬期間の指導: 東京で製図方法や基礎的教育を実施。

教え子たちの活躍: ライマンの帰国後, 門下生たちは工部省鉱山局, 開拓使, 農商務省, 北海道庁の地質調査・炭鉱開発等の技術者となり, さらに, 鉱山会社の技術者・経営責任者へと転身するものが輩出し, 我が国, 特に北海道・九州・常磐の炭鉱をはじめとする鉱業の発展に重要な役割を果たした。〔山内—幌内炭鉱, 島田・山際—幾春別炭鉱, 坂—夕張炭鉱・坂炭鉱, 稲垣—三池炭鉱, 西山—三井鉱山(三井砂川), 安達—古河鉱業, 稲垣—明治炭鉱, 杉浦—別子銅山, 島田—日本鉱業会初代理事など〕

3-3. 北海道開拓政策に関する指導・助言

ライマンは調査報告書や書簡の中で, 地質・鉱床調査以外にも, 北海道開拓に関する多様な指導・助言を行った。

茅ノ澗(茅沼)炭鉱の改良: 幕末に箱館奉行が開坑した炭鉱の再開発。〔「茅沼炭山採掘見込報告」(英文), 1875 (明治8)年〕

鉄道建設: 幌内鉄道の路線測量など。〔1875 (明治8)年〕

道路整備: 原野・沿岸道路と市街地の整備など。〔「北海道道路開通論」(英文), 1873 (明治6)年〕

港湾整備: 茶津内・渋井両港(茅沼村)測量。〔「北海道岩内近傍澁井茶津両港概略測量之圖」1874 (明治7)年〕

気象予報: 通報網の整備。〔「大日本気候報文」(英文), 1873 (明治6)年〕

炭鉱経営: 官営批判(民営論)

博物館設立: 開拓使博物場・物産館(北海道を紹介するための鉱物・動植物・農水産物標本・アイヌ・和人の民俗資料, 写真・地図・図書を収集・陳列する展示・教育施設)の設置。〔1874 (明治7)年〕

開拓政策の基本方針: 政府が力(国家資本)を投入す



第8図 ライマンと門下生・助手たち

- ① [左上] 1880 (明治13)年, 東京麹町平河町のライマン邸にて [U.MASS]
- ② [右] ヘンリー・スミス・マンロー (地質鉱山測量補助) [コロンビア大学]
- ③ 1907 [左下] (明治40)年, ライマンと旧助手たちとの再会 [U.MASS]

べきは開拓に不可欠な基盤整備事業であり, 開拓事業 (移民・産業開発など) は民間資本に任すべし。

4. 日米文化交流とライマン―異文化への関心

ライマンは, アングロサクソン系のマサチューセッツ移民の名門出身であることにプライドをもち, 当時のニューイングランドの知識人に多く見られた近代的な合理主義・自由主義・個人主義など西洋的価値観を有する優秀な科学者・技術者であるとともに, 日本の東洋的伝統文化にも強い関心を抱き, 理解しようと努めた大の親日家であった。

4-1. 親日家ライマン

ライマンの人柄から開拓使の問題点を指摘していたが, 日本人の特性を理解した親日家であった。

和名: 邊士來曼, 來岷, 邊司來曼

人柄: 几帳面・勤勉・実直・潔癖・厳格な性格。意欲的・積極的で, 使命感・正義感・責任感・自己主張が強い。菜食主義者, 終生独身。

開拓使との対立: 人柄を反映して, しばしば開拓使と対立し, 批判をくりかえす。通訳・助手への指揮・命令権, 開拓使仮学校生徒の卒業後の奉職義務, 開拓使女学校生徒との結婚問題, オランダ人女性教師に対する役人の無

礼, 役人の怠慢と権威 (官僚) 主義, 役人と商人の癒着, 国家の放漫財政 (予算の無駄遣い), 官営方式 (国家資本) による北海道開拓 (官営工場, 保護移民など) 計画と不透明な事業内容など。

日本・日本人観: 当時の日米関係を「西洋昔物語―森 (もり) の中 (なか) にねむる美女 (うつくしきおんな)」 (Sleeping Beauty) に登場する美麗女 (日本) と王子 (わかぎみ) (米国人) にたとえ, 近代化が遅れている日本を指導し, 発展に協力するのがアメリカ人であるととらえる (図9)。また, 日本人の習慣はアメリカ人のそれと著しく異なるが, 必ずしも一方的に劣っているとは断定できない。日本人は直観的・皮相的・現実的で, 感覚的な洞察力に優れ, 模倣は得意であるが, 西洋人のもつ思考力, 論理性, 創造性に劣り, 真の芸術に必要な深遠さに乏しい, ともとらえる。その一方, アメリカ人について, 自己主張が強く, エネルギッシュで, 利己的なサクソン民族は, 従順で思いやりがあせり, 献身的で親しみやすい日本人と比べ, 優しさと感じの良さで劣る, とも述べている。

4-2. 日本文化への興味・関心

日本語の修得: 彼の業務には日本人の通訳が同行したが, 自ら積極的に日本語を修得し, 日本文化を理解しよ

うと努めた。日本語の練習帳や日記、標題に振り仮名(カタカナ)を付けた図書などが多くみられ、書道も学んだ。さらに、先住民族の言語・アイヌ語の修得にも努めた。

図書・絵画収集： 広い分野にわたる文献や浮世絵・工芸品などを多数収集。〔ライマン・コレクション参照〕

日本での暮らしぶり： 東京では日本庭園付きの和風邸宅(元旗本の「屋敷」)に住み、和食も好み、芝居・落語・義太夫・操り人形・琴・三味線など日本の伝統芸能を楽しむ。屋敷門前の長屋には彼の助手・料理人・門番・馬丁も住んだ。〔ライマン・コレクション参照〕

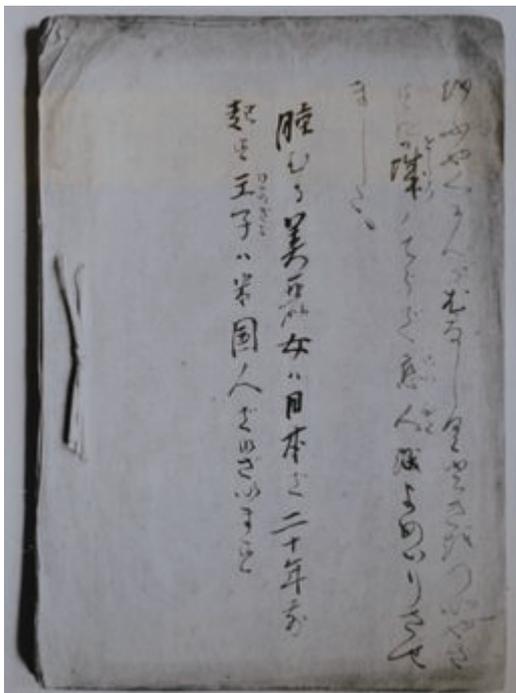
日本の紹介：“Notes on Japanese Grammer”(「日本語の文法について」1877～78)，“The Character of the Japanese”(「日本人の国民性」1885)，“Japanese Sword”(「日本刀」1895)，“The Petroleum Industries of Japan”(「日本の石油産業」1896)などを著し、日本を広く紹介。

帰国後の交流：中嶋 徳(東京時代の馬丁の子息)の教育、門下生・日本人留学生などとの交流・支援が続いた。

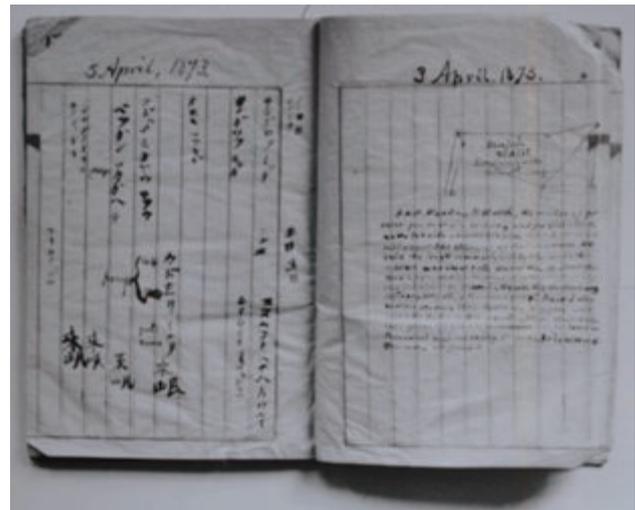
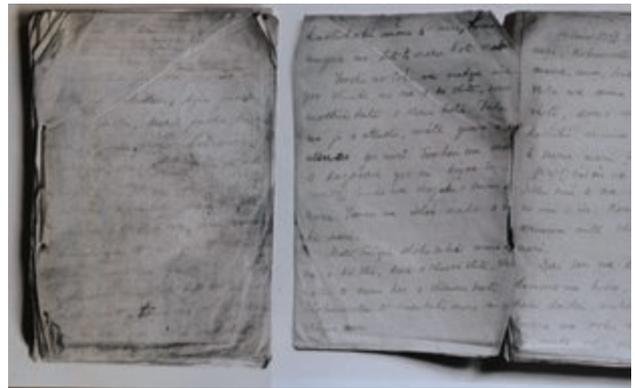
4-3. フォーブス図書館旧蔵のライマン・コレクション

ライマンは几帳面な性格の人物で、親日家でもあったので、彼の死後、日本・北海道関係資料を含む膨大なコレクションが残され、遺族から米国哲学協会、ペンシルベニア歴史協会、郷里ノーサンプトン市のフォーブス図書館などに寄贈された。

フォーブス図書館には1921年、約5,000点が寄贈さ



第9図 ライマン訳『西洋昔物語—森の中にねむる美女』1875(明治8)年、ヨーロッパの民話“Sleeping Beauty”の和訳(助手たちも協力)、手書き(毛筆) 10 [U.MASS]



第10図 日本語習得の記録 [上] 練習帳(ローマ字), [下] 日本語の日記: 1873(明治6)年4月 [U.MASS]

れ、その内の日本関係資料約2,000点がマサチューセッツ農科大学(現マサチューセッツ大学アマースト校)の板野新夫助教授とアマースト大学学生中川久順の協力により整理された。

その内容は社会・歴史・文化・科学技術史研究などで、一級資料が多く含まれる。

○ライマンの作成した報告書・論文・地図・フィールドノート類

先に述べた専門の地質学関係以外のものを含む広い分野にわたる著作物150以上。日本滞在中のフィールドノート40冊のうち北海道関係が18冊を占める。

○往復書簡

往復書簡(控)の綴は、30冊(1864～1892)。ライマンは手まめな人物で、発信した書簡の控(写し)を多く残した。日本滞在中のものは8冊で、黒田清隆・榎本武揚・大島圭介・フェノロサなど著名人宛のものも多い。

○図書・地図類

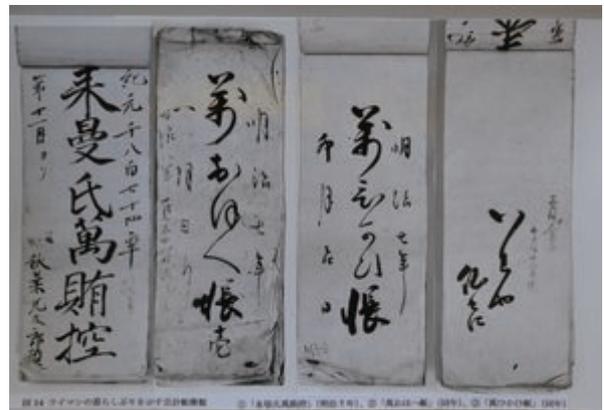
ライマンの蔵書(和書・漢籍・洋書)は約4,000冊。この内、和書は江戸後期～明治初期の出版物が大部分を占め、その内容は、地質学・思想・哲学・文学・歴史・



第11図 ライマンの邸宅—東京平河町（元旗本屋敷）, 1877（明治10）年～18782年頃 [[U.MASS
 [左上]和風庭園, [右上] Dining Room(食堂), [左下] Living Room(居間), [中下] Office(事務室), [右下] Library(書齋)



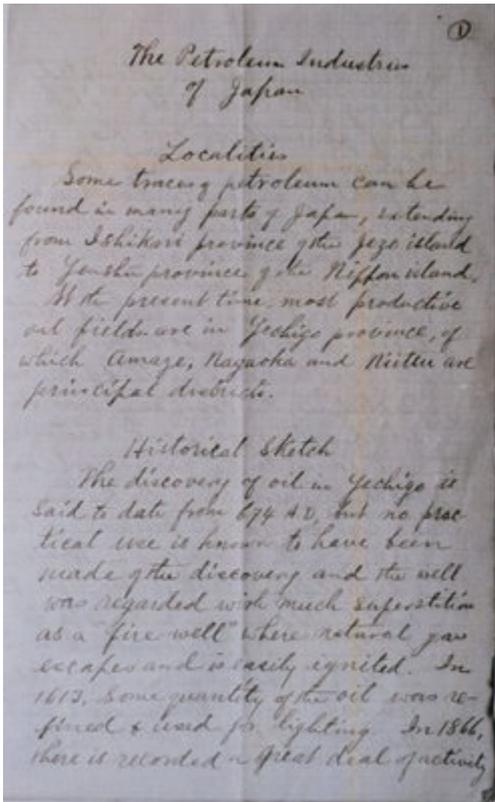
第12図 和装のライマン（右）: 1880（明治13）年頃, 東京平河町のライマン邸庭園 [U.MASS]



第13図 ライマンの暮らしぶりを示す会計帳簿類 [U.MASS]
 左から [上] 「来曼氏萬賄控」（明治7年）, 「萬おほへ帳」（同年）, 「萬ひかひ帳」（同年）, [下] 「御通」（明治11年）, 「日記」（明治10年）

地理・美術・自然科学・教科書・辞典・文法など多岐にわたる。日本地図は数百枚。彼の日本への関心の広さと深さがうかがえる。

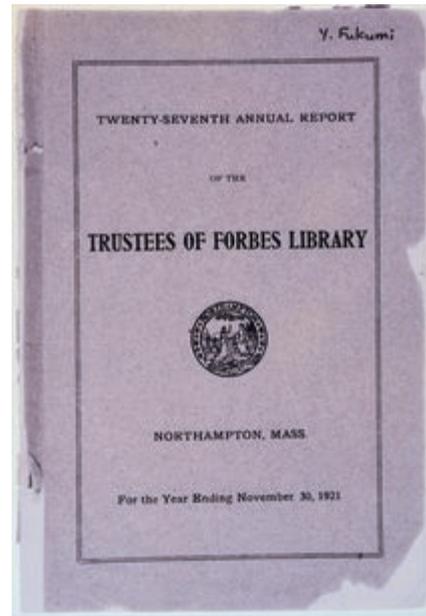
北海道関係では、上原熊次郎『蝦夷方言藻汐草』（1804）、松浦武四郎『東西蝦夷山川地理取調紀行（蝦夷



第14図 The Petroleum Industries of Japan : 「日本の石油産業」原稿, 1896(明治29)年 [U.MASS]



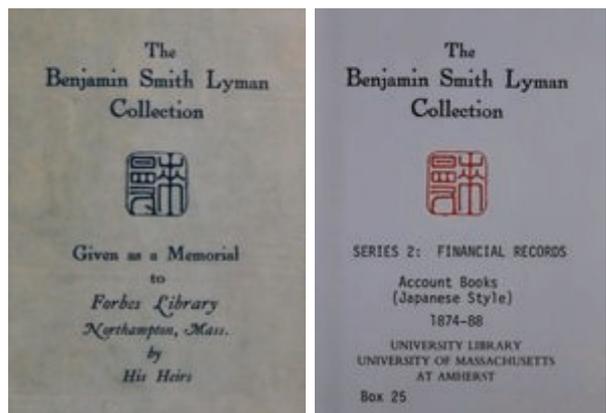
第16図 フォーブス図書館におけるライマン・コレクションの整理作業: 1921年 [FORBES]



第17図 フォーブス図書館の第27回年報 (コレクションの整理作業): 1921年 [FORBES]



第15図 ライマン・コレクション旧所蔵機関のフォーブス図書館: 1981(昭和56)年, マサチューセッツ州ノーサンプトン市



第18図 コレクションに貼られたラベル [左] フォーブス図書館 [右] マサチューセッツ大学アマースト校図書館 [U.MASS]

夷日誌, 10種』(1861~1878), 津田 仙『北海道開拓雑誌』1~41(1880~1881), 北海道庁地理課(西山正吾)『北海道鉱床調査報文』(1896), 松浦竹四郎『東西蝦夷山川地理取調図』(1859)などの重要文献が多い。

○書画・写真類

浮世絵などの書画, 東京の邸宅・助手・日本各地の写真,

○会計簿・大福帳・領収書綴類

日本滞在中のもの約40冊。食生活, 書籍・地図・工芸品などの購入, 大衆芸能の鑑賞など暮らしぶりがわか

る。

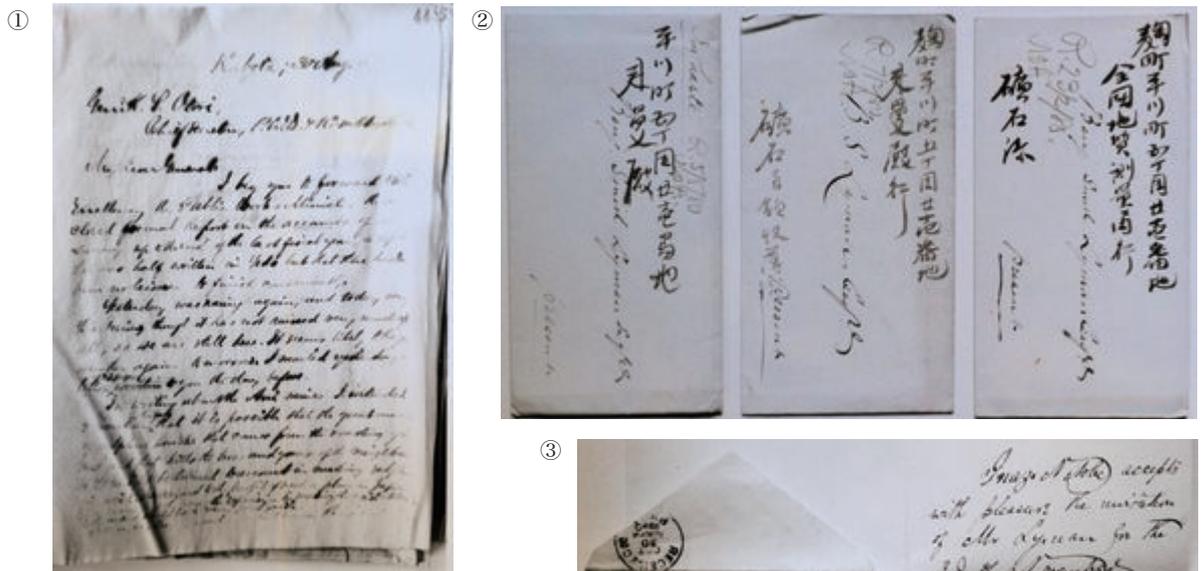
4-4. コレクションの保存運動

1985(昭和60)年, フォーブス図書館が財政難からコ



第19図 報告書・論文・地図・フィールドノート

- ① [左] GEOLOGICAL NOTES BY HENRY S. MUNROE, E.M., Professor of Geology and Mining in the Imperial University of Tokio, and Formerly Assistant Geologist to the Kaitakushi. PUBLISHED BY THE KAITAKUSHI. 1876. 東京大学教授で元開拓使の地質鉱山測量補助マンロー（ライマンの助手）の報告書：1876（明治9）年，開拓使〔U.MASS〕
- ② [中] 「日本北海道山越内石油地方畧測之地質及び地理的の圖」1875（明治8）年，開拓使（英文標題付）〔北大〕
- ③ [右] フィールド・ノート (Survey Note Book L10):1874（明治7）年5月28日（北海道室蘭トッカリモイの部分）〔U.MASS〕



第20図 書簡類〔U.MASS〕

- ① 大鳥圭介宛 ライマン書簡（控）－1877（明治10）年8月30日付
- ② ライマン宛 鉱石・領収書送り状－封筒4通，1880（明治13）年2・5月
- ③ ライマン宛 新渡戸稲造書簡－1890（明治23）年10月30日付

コレクションの売却を決定，近隣のマサチューセッツ大学アマースト校が購入し整理，保存することとなり，そのための資金募集運動が進められた。

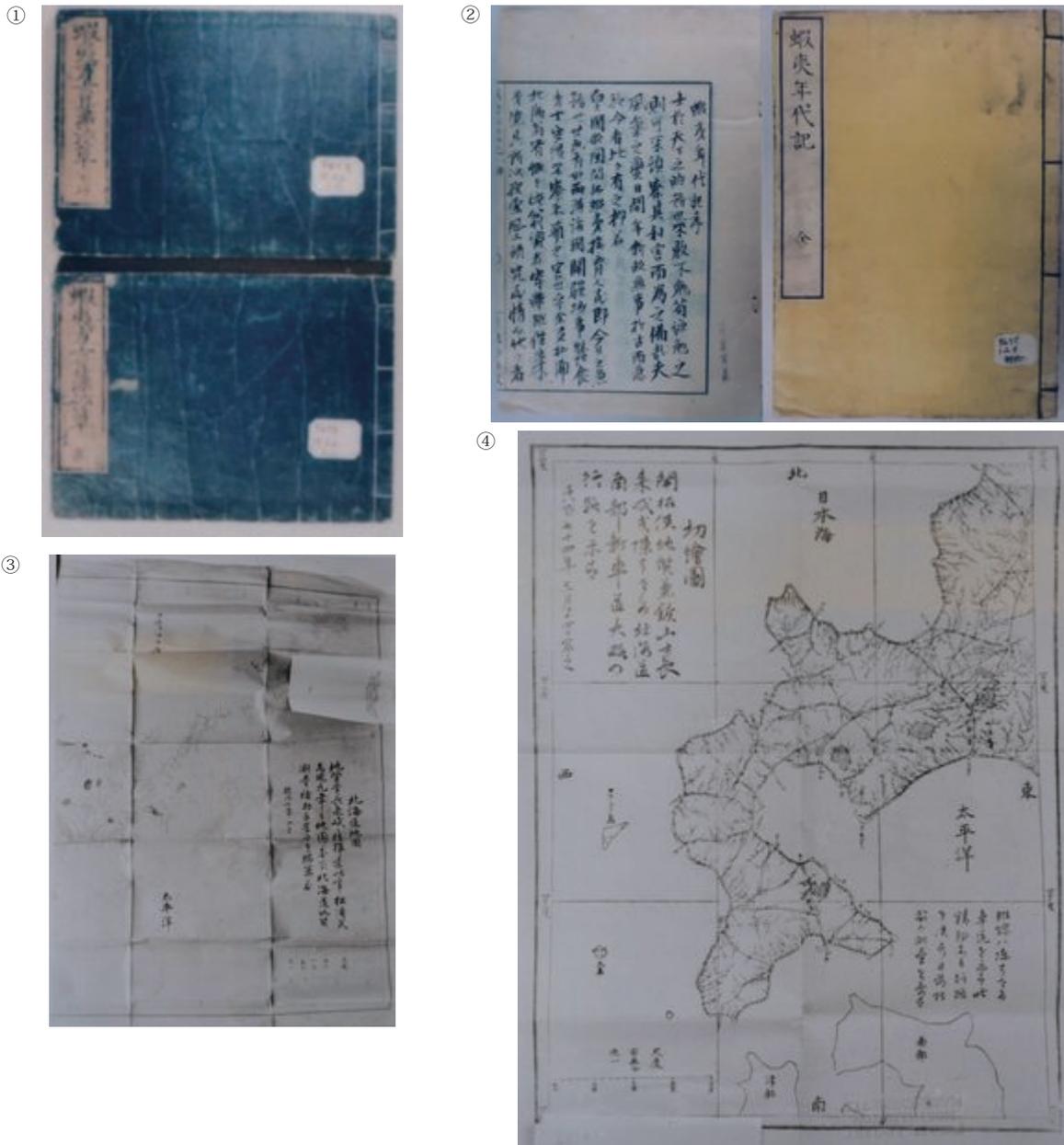
北海道でも，ライマン・コレクション保存協力委員会が結成され，募金活動に協力した。
〔保存活動の経過〕



第 21 図 北海道関係図書・地図 [U.MASS]

- ① 寺島良安『和漢三才圖會 卷第十三 異國人物』1715 (正徳 5) 年, ②鈴木牧之『北越雪譜 初編』1835 (天保 6) 年, ③瀧澤馬琴『里見八犬傳 第二・九輯』1840 (天保 11) 年, ④市川央坡『英國單語圖解上・下』1872 (明治 5) 年, ⑤ F.A. ボトル『豊(ほう)筑(ちく)石炭山(せきたんざん)報告書』1878 (明治 11) 年, ⑥地質學社(桑田知明・島田純一)編・発行『地學雜誌 第貳號』1879 (明治 12) 年, ⑦明治十三歳十月調査『日本出版書籍目録』

1980(昭和 55) 年 副見恭子 (マサチューセッツ大学 アマースト校図書館東洋図書主任司書), フォーブス図書館ライマン・コレクションの和書・漢籍・洋書(中国・日本関係)を借り出し, 整理・目録・解題作成に着手.



第 22 図 江戸時代～明治初期の図書〔U.MASS〕

①上原熊次郎「蝦夷方言藻汐草」1804(文化元)年, ②松浦武四郎「蝦夷年代記」1870(明治3)年, ③「北海道地図」(部分)1874(明治7)年—ライマンの指揮により松浦武四郎の蝦夷図を助手が複写し調査に使用, ④開拓使「切繪圖—北海道南部新車道大略行路圖—」1874(明治7)年(ライマンの道路建設案)

1983(昭和58)年 副見恭子, 東京でコレクション保存のための募金活動.

1984(昭和59)年 マサチューセッツ大学アマースト校図書館, コレクション調査.

1985(昭和60)年 フォーブス図書館, コレクションの売却計画を表明. マサチューセッツ大学の日本文学教授・日本史学教授・副見恭子ら, 同大学のコレクション購入運動を開始.

1987(昭和62)年 マサチューセッツ大学, コレクション(浮世絵を除く)を購入し, 整理・保存のための募金計画を決定. 北海道でも新聞・TV等が運動を紹介し,

支援の機運高まる. 11月, 副見恭子, 募金運動のため来道.

1988(昭和63)年6月 北海道でライマン・コレクション保存協力委員会発足(会長・樫原泰明)し, マサチューセッツ大学から募金協力依頼状と購入・保存経過報告書届く. 11月, 委員会の募金活動開始.

1990(平成2)年2月 北海道マサチューセッツ姉妹提携記念レセプションの席上, 樫原委員長からマサチューセッツ大学学長ナップ氏にコレクション保存資金を贈呈.

1995(平成7)年8～11月 北海道開拓記念館で「ラ



第 23 図 ライマンの会計帳簿類 [U.MASS]

①「萬ひかひ帳」1874 (明治 7) 年, ②「選帳 壹」1874 (明治 7) 年 ③「御留中日記」1877 (明治 10) 年, ④人馬帳 (人馬継立帳)」1877 (明治 10) 年 (工部省地質学土礦山士長 邊, 司, 来曼, ⑤官金出納日記撰帳 (DAYBOOK, JOURNAL, LEDGER) 1877 (明治 10) 年

ライマン・コレクション展」開催され、道民にコレクションを紹介。

(ライマン関係資料の主な所蔵機関)

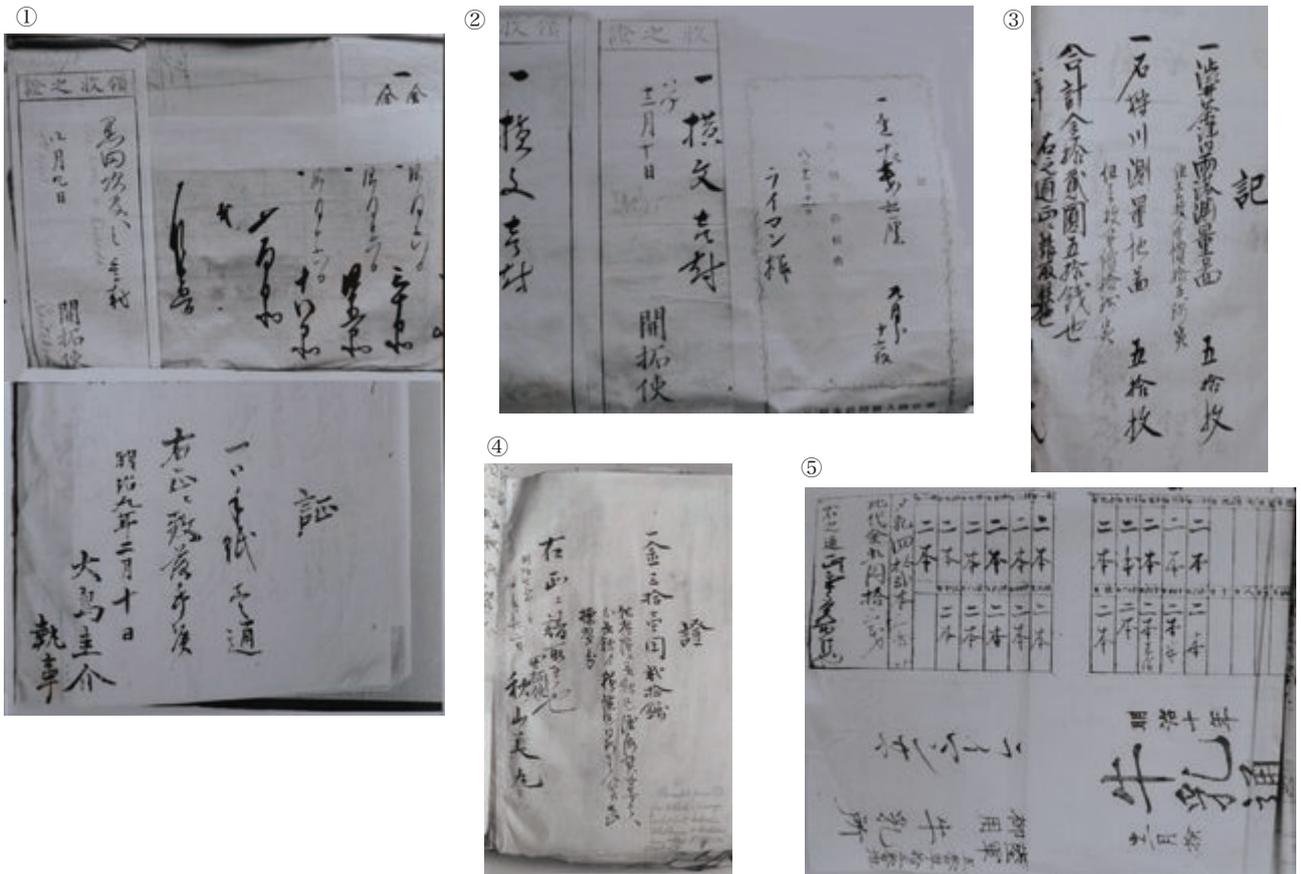
北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園・博物館：主に鉱物標本類。

北海道大学附属図書館：調査報文・論文（出版物と

原稿）、地質・地形図、書簡（原文およびペンシルベニア歴史協会ライマン文庫の写真複製）、写真など。

マサチューセッツ大学アマースト校図書館：上記、ライマンコレクション参照。

ペンシルベニア歴史協会図書館・アメリカ哲学協会図書館：書簡・地質調査記録・地図など。



第 24 図 ライマン宛領収書類 [U.MASS]

①書筒等領収証 [上] 開拓使 (黒田次官宛文書 1 封 [下] 大鳥圭介執事 (大鳥宛手紙 1 通), ②横文 (英文) 新聞代金領収証 [左], [中] 開拓使 (開拓使宛横文 1 封), [右] 東京繪入新聞社 (新聞 16 枚, 13 銭 6 厘), ③澁井茶津内両港測量圖「石狩川測量地圖」代金領収書—写真掛 (各 50 枚, 12 円 50 銭, ④横浜・函館間往復渡海賃領収証— 開拓使 秋山美丸 (1 人分, 31 円 20 銭), ⑤牛乳代金領収書— 陸軍御用牛乳所 (明治 10 年 12 月分, 42 本, 5 円 13 銭)

5. 終わりに

本稿には特に注を付してはいないが、末尾に掲げた参考文献など多くの先学の研究成果に負うところが多い。先ず、謝意を表したい。

また、本稿では、多くの図・写真等を紹介することに努めた。これらは本文で触れたとおり、マサチューセッツ大学アマースト校図書館の尽力によって購入・保存されたライマン・コレクションに含まれるものが多く、筆者が 1981 年に旧蔵機関のフォーブス図書館で複写した資料、ライマン・コレクション保存協力委員会の常任委員として募金活動に協力した際にご提供いただいた資料、さらに、1995 年、筆者の勤務先 (当時) の北海道開拓記念館 (現北海道博物館) における「ライマンコレクション展—明治初期の北海道とマサチューセッツ州の交流」の開催に伴う調査の際に複写した資料を利用させていただいた。当コレクションの保存活動に尽力された故副見恭子氏をはじめ、お世話になった関係機関の多くの方々に深く感謝いたします。

さらに、昨年の記念講演及び本稿の作成にあたり、宮



第 25 図 ライマン・コレクションを購入したマサチューセッツ大学アマースト校図書館 1995 (平成 7) 年

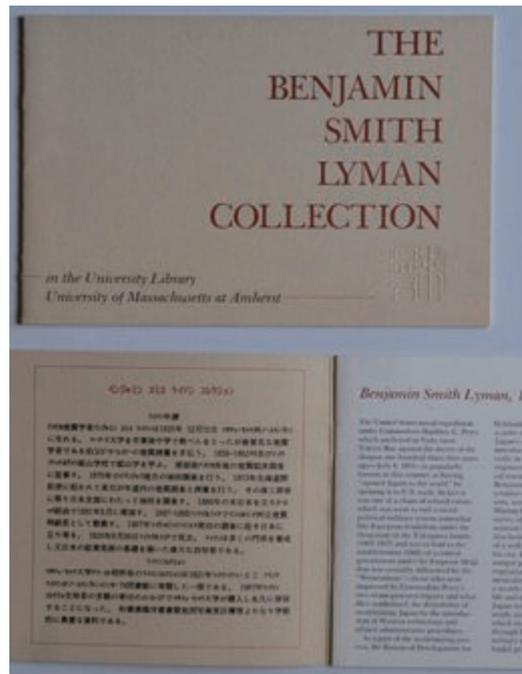
坂省吾氏の特段のご協力をいただいたことを明記し、お礼申し上げます。

(主な参考文献)

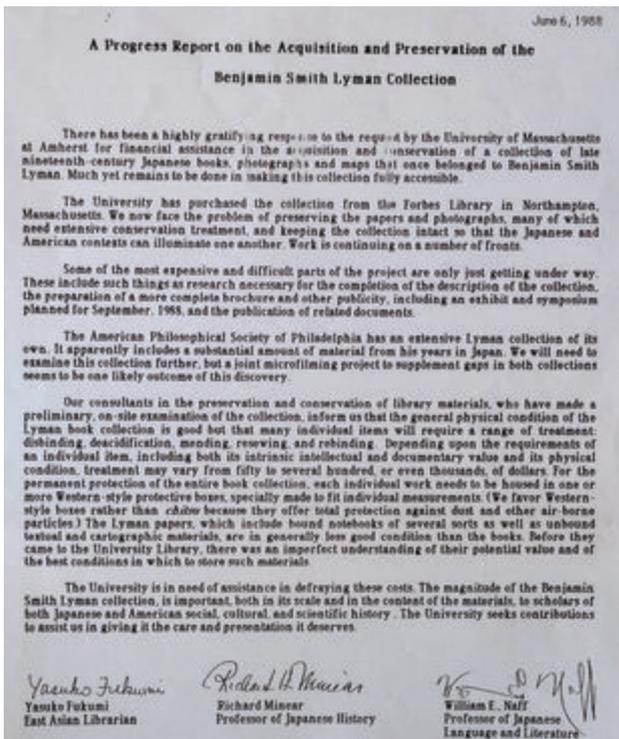
① REPORTS AND OFFICIAL LETTERS TO THE KAITAKUSHI, BY HORACE CAPRON, COMMISSIONER AND ADVISER, AND



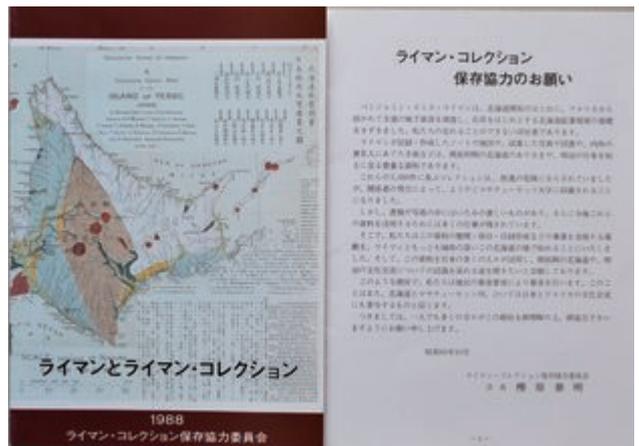
第26図 「ライマン・コレクションが危うい！」－「北海道新聞」1987（昭和62）年11月8日



第28図 THE BENJAMIN SMITH LYMAN COLLECTION－1988（昭和63）年，マサチューセッツ大学アマースト校図書館が購入したコレクションを紹介したパンフレット



第27図 マサチューセッツ大学のコレクション購入・保存に関する経過報告並びに募金協力要請状 1988（昭和63）年6月，大学図書館東アジア部門司書副見恭子，日本史学教授リチャード・マイニア，日本語・日本文学教授ウィリアム・E. ナフ連名



第29図 「ライマンとライマン・コレクション」－1988（昭和63）年10月，ライマン・コレクション保存協力委員会が募金協力を呼びかけたパンフレット。



第30図 コレクション保存資金が贈呈された北海道・マサチューセッツ州姉妹提携記念レセプション－1990（平成2）年2月

HIS FOREIGNASSISTANTS.TOKEI:PUBRISHED BY THE KAITAKUSHI,1875 [ライマンの主要な北海道調



第31図 北海道開拓記念館（現北海道博物館）主催「ライマン・コレクション展—明治初期の北海道とマサチューセッツ州の交流—」の図録—1995（平成7）年8月



第32図 コレクションの保存・整理・研究活動の功労者副見恭子氏（左端）と保存協力委員会役員との懇談—1999（平成11）年6月，北海道開拓記念館。

査報告書を含む]

- ② 開拓使外事課訳『開拓使顧問 ホラシケプロン報文』明治12(1879)年2月，開拓使
〔上記報文の和訳版。北海道庁編・発行『新撰北海道史第六卷—史料二』昭和11年11月に復刻〕
- ③ 山内徳三郎「ベンジャミン，スミス，ライマン氏小傳」（孔版）明治44(1911)年〔西山正吾旧蔵，今津健治解題「山内徳三郎著『ベンジャミン・スミス・ライマン氏小伝』』（エネルギー史研究会『エネルギー史研究』昭和54(1979)年3月，西日本文化協会）
- ④ 桑田權平著・発行『來曼先生小傳』昭和12(1937)年9月〔翌年，英語版発行〕
- ⑤ 原田一典『お雇い外国人 ⑬ 開拓』昭和50(1975)年12月，鹿島出版会
- ⑥ 関秀志「カナダ・アメリカの北海道史料を訪ねて（二）」（北海道史研究会編・発行『北海道史研究』32号，昭和58(1983)年6月）
- ⑦ 編集委員会『ザ・ヤトイ—お雇い外国人の総合的研究—』昭和62(1987)年4月，思文閣出版
- ⑧ ライマン・コレクション保存協力委員会編・発行『ライマンとライマン・コレクション』昭和63(1988)年
- ⑨ 切替英雄「American Philosophical Society LibraryのLyman Papers」（北海学園大学開発研究所編・発行『開発論集』第50号，平成4(1992)年12月）
- ⑩ 藤田文子『北海道を開拓したアメリカ人』平成5(1993)年7月，新潮社

- ⑪ 副見恭子「蔵書コレクションが語るライマン 北海道—米マサチューセッツ州姉妹提携5周年」（北方圏センター編・発行『北方圏』90号，平成7(1995)年1月）
- ⑫ 北海道開拓記念館編・発行『第41回特別展目録「ライマン・コレクション展」—明治初期の北海道とマサチューセッツ州の交流—』平成7(1995)年8月
- ⑬ 鈴木 豊「ライマンの日本語研究」（『文京学院大学外国語学部文京学院短期大学紀要』第6号，平成18(2006)年）
- ⑭ 北海道大学総合博物館編・発行『北海道大学総合博物館第57回企画展示 ライマンと北海道の地質—北からの日本地質学の夜明け—』平成20(2008)年8月
- ⑮ 三浦泰之「明治初期におけるお雇い外国人の家計簿—マサチューセッツ大学アマースト校図書館所蔵ライマンコレクションの調査から—」（北海道開拓記念館編・発行『北方地域の人と環境の関係史 2010—12年度調査報告』平成25(2013)年3月）
- ⑯ 三浦泰之「同上 補遺」（同上『北方地域の人と環境の関係史 研究報告』平成25(2015)年3月）
- ⑰ 副見恭子『ライマン雑記』令和2(2020)年4月，松本智子・井上和子，ミカリノ出版〔「ライマン・コレクションとの出会い」（『地質ニュース』433号、1990.9），「ライマン雑記(1)～(23)」（同誌427～668号，1990.3～2010.4）を収録。〕
- ⑱ 関 秀志「副見恭子さんとライマン・コレクションの保存運動」（『ライマン雑記』⑰ 238-241）

編集後記

ここに総合地質第8巻をお届けします。今年度は5件の投稿がありましたが、1件は次号へ持ち越しとなりました。第9巻への掲載を期待しています。今回の巻には非会員の関 秀志氏より投稿がありました。北海道の地質の開拓期に貢献されたライマンに関する資料で、後世へ伝えるべき内容と判断し、掲載しました。総説や論説については、査読者・校閲者による建設的かつ丁寧な査読・校閲は、それぞれの論文を改善する上で大いに役立ちました。査読・校閲者は、宮坂省吾、川村信人、君波和雄、田近 淳、嵯峨山 積、宮下純夫（敬称略）の諸氏です。ここに記して深く感謝申し上げます。来年度の第9巻への投稿受付は6月～7月頃を予定しています。次号も多彩な原稿が多く集まることを期待しています。

今年度は新型コロナ感染もだいぶおさまり、様々な社会的活動がコロナ禍以前と同様になりました。地球温暖化による熱波や干ばつ、洪水のニュースは絶えませんでした。2024年は猛暑だった昨年をさらに上回る記録的高温となりました。気候変動は今後さらに注視していく必要があります。

編集委員長 宮下純夫

発行者 NPO 法人 北海道総合地質学研究センター (HRCG)

札幌市南区真駒内上町5丁目5番6号

URL: <http://www.hrcg.jp/>

E-mail: office@hrcg.jp, 電話 080-5830-2016

印刷 (株)三誠社 札幌市中央区北6条西15丁目3-7 N6ビル